

J. C. オーツの *them* について

依岡道子

A Study of Oates's *them*

Michiko YORIOKA

I

J. C. オーツの長編小説『かれら』(*them*, 1969) は、1970年度のアメリカ小説の National Book Award を獲得している。この作品は構成上の工夫がなされていること、主人公達の個人的な生き方の展開、日常生活の詳細な描写など優れた点が多い。更に、彼女の初期の小説におけるオーツ的テーマの区切りをなす重要な作品である。

作品の冒頭に「著者覚え書」(Author's Note) が来る。それによれば、著者オーツが the University of Detroit で教えていた頃の学生モーリーン・ウエンダル (Maureen Wendall) から聞いた話が小説の素材であるということになっている。物語はウエンダル家の人々の歴史と言えるもので、彼らの人生が余りにも波乱に富み、現実というよりもむしろフィクションと言えるものだと考え、それを小説化することになったと記されている。

Nothing in the novel has been exaggerated in order to increase the possibility of drama—indeed, the various sordid and shocking events of slum life, detailed in other naturalistic works, have been understated here, mainly because of my fear that too much reality would become unbearable.¹⁾

上記の一節や “... perhaps drawn to her by certain similarities between her and me—” (p.11) という著者のことば、そして物語中に挿入されているオーツ宛のモーリーンの手紙などから、読者は著者とモーリーンを同一視してしまうかもしれない。Creighton はオーツのインタビューの中から、この点について次のように述べている。“...Oates warned that this book is written in mock-naturalism, a form outdated and inappropriate to the material; that the note and the letters are totally fictitious, merely the trappings of a pseudo-naturalistic report; and that one should not confuse the narrator with the author.”²⁾

オーツの言うように、Author's Note や手紙を利用するという方法は古くさいかも知れないが、それらは小説の一部であるから、その中の著者の素材の入手方法やその処現方法も小説技法と考えるべきであろう。暴力に満ちた貧しい人々の日常生活やデトロイト暴動などの詳細な描写によりこの作品を個人対社会、貧者対金持という社会問題を従来の naturalist の方法で追求しているように外面的には見えるかもしれない。しかし *them* の中でオーツは、社会批判を行っているのではない。オーツ自身のことばにあるように、“mock-naturalism” か “parody of naturalism”³⁾ かいづれにせ、オーツの初期の小説の一貫したテーマであるアメリカ人の抱く強迫観念、アメリカ人の現実の姿を自己喪失の恐怖あるいは自己の存在の意味の追求という主題と関連させながら描いている。

them の主人公達は、ウエンダル家の2世代にわかる母親ロレッタ (Loretta) と子どもの中のジュールズ (Jules) とモーリーン (Maureen) の兄妹である。兄妹の対照的な生き方、自己を確立する過程を考察し、更にオーツの小説には form がないと言われるが、*them* では主題がいかなる形式で展開されるかを考察したい。

II

ウエンダル一家は lower middle class に属し、都会のスラム街の住民である。物語は 1937 年 8 月のある暑い日の夕方から始まり、1967 年のデトロイト暴動までの 30 年間にわたっている。物語の背景となるのは 1930 年代の不況の時代、第二次世界大戦、階級闘争といえる 1967 年のデトロイト暴動である。特にデトロイト暴動の状況が詳細に描かれ、物語に現実感を与えている。そういう時代背景の中で、ロレッタの両親は田舎から中西部の運河沿いの大都会に出て来るが、父親は不景気の為に失業し、酒びたりとなり、兄ブロック (Brock) はピストルを持ち歩き、狂気じみた言動で彼女を脅かしている。

彼女の不安が現実のものとなり、ある夏の夜、彼女がボーイフレンドのバーニー (Bernie) を自分の部屋に連れて来て一緒に眠っている時、彼はロレッタの兄にピストルで殺される。

them には、この殺人事件から最後のジュールズによる警官殺しまで暴力的な出来事が溢れている。この偶然の出来事が彼女の人生を狂わせ、引き続いて悲劇をもたらすかのように、彼女と彼女の子ども達に大小様々の出来事が生じる。ウエンダル家の人々にのみ偶発事件が襲いかかるわけではないと思われるが、ある批評家の文中から暴力的な出来事についてのオーツの考え方を示す一節を引用したい。“The specific ‘fact’ of murder, accident, abandonment, prostitution, and beating, which victimize these characters, are, according to Oates, characteristic of modern urban life.”⁴⁾ 暴力的な事件が登場人物達の生活・生命を脅かすが、それらの出来事は小説のテーマというよりも物語の背景あるいは舞台 (setting) の役割を果しているように考えられる。

本来、特別な出来事も人間とは直接的関係はなく、単なる偶然である。両者の間に因果関係を見出し、悲劇化するのは人間の側の問題である。Friedman はオーツの小説の重要な点について、“The center of gravity in Oates’s fiction is not ‘in the sense of apocalypse’ but in the ‘ordinary morning’ that follows it.”⁵⁾ と述べている。確かにオーツは出来事自体の重要性や社会的意義を問うのではなく、主人公達が如何に出来事にかかわりを持ち、偶然性を必然性に変えながら人生を形成して行くかという人間の日々の営みの方を重視していると言える。

ロレッタは恋人が殺されるという事件の後、警察官のハワード・ウエンダル (Howard Wendall) に自分の身を委ねるという方法で事件の解決とした。それは彼女が自分の環境、自分の限界 (limits) を判断し、決断したことであり、それが彼女の歴史の始まりである。

Loretta lived in an eternity of flesh: all week she knew the resistance of muscle, she knew its sad limits, and left to herself she explored her toenails as earnestly as her face, summing everything up, judging and hoping. (p.33)

彼女は自分の財産である肉体を利用し、ハワードと結婚し、生き延びて行く運命を選んだ。その時、“She had come to the end of her life, Loretta thought, ... Everything was fixed and settled, good.” (p.54) と自分の運命の完成を感じているが、実際は彼女の人生の始まりであった。

オーツが *them* によって National Book Award を受けた時のことばの中で、彼女が小説に

おいて何を書こうとしたかを述べている。

In the novels I have written, I have tried to give a shape to certain obsessions of mid-century Americans—a confusion of love and money, of the categories of public and private experience, of a demonic urge I sense all around me, and urge to violence as the answer to all problems, an urge to self-annihilation, suicide, the ultimate experience and the ultimate surrender. The use of language is all we have to pit against death and silence.⁶⁾

them においても、登場人物が対処することになる問題は、“love”, “money”, “self” 等々であり、これらの諸問題は人間の悪魔的衝動、弱者の用いる暴力への衝動などと結び付いて、重大な出来事を引き起こし、人々の歴史を形成している。

スラム街に住む彼らにとって共通している悩みは金銭である。ロレッタは特にお金に困窮している。3人の子どもを連れて田舎からデトロイトに出て来て2日目、*prostitution* によって生活費を得ようと街頭に出て、私服刑事に捕まる。彼女は金銭面での夫の無力に対して息子のジュールズに不平を漏らし、金銭により男性の価値を判断している。ジュールズは金銭面での才覚を持っていたが、父親ハワードの事故死の後、父親の一生を考え、貧困と愛情のない家庭の中で生きた父親の人生はお金に対する「怒り」(anger) であったとみなす。ジュールズにとっては、お金は「怒り」ではない。“Money was an adventure. It was open to him. Anything could happen. He felt that his father’s essence, that muttering dark anger, had surrounded him and almost penetrated him, but had not quite penetrated him; he was free.” (p.147) お金はジュールズには冒険であり夢である。彼自身は金銭に対する自信と成功の自信を常に持っている。

ジュールズはガールフレンドを通じて得体の知れないバーナード・ゲッフェン (Bernard Geffen) と知り合い、彼から大金を任せられ、同時に成功のチャンスが与えられる。しかしゲッフェンがナイフで刺殺され、ジュールズは犯罪の恐怖の中で、お金を全て死体に戻している。

一方モーリンの方は、スラム街での生活から抜け出て、自由を得るために金銭への強い関心を抱き始める。母親と同様にお金を得る為に *prostitution* を試みる。“Freedom came to her like air from the river, not exactly fresh, but chilly and strong; she was free and she had escaped.” (p.199) お金を手にしてモーリンは一時的な自由と家族からの逃避を達成出来たと錯覚している。しかし本の中に隠していたお金が義父にみつき、彼女の意識の中に潜在的に存在していた暴力に対する恐怖が現実のものとなり、彼女は父親に殴打され「自己」(self) を失う。

物語においては、お金は人々を魅惑するものであり、同時に生命を脅かす要因となっている。“money is the symbol of all that is ugly, oppressive and yet alluring”⁷⁾ としてオーツは描いているといえよう。現代の物質文明のアメリカにあって、最も現実性があり、自由を得るための鍵であるはずのお金に裏切られたモーリンにとっても、お金を人生の冒険と考え、金銭的才能と幸運に恵まれているジュールズにとっても、それは「魔法のような」(magical) 、あるいは「魔法」(magic) という言葉で表わされている。“The man’s giving her his money was not a simple act but a transformation of the money itself, so that it became another kind of money, it became hers, it was magical in her hands and secret from all the world, and yet it was unchanged.” (p.205) 更に、ジュールズがバーナードから1万ドルの小切手の現金化を頼まれた時、“The magic moment had not yet come about.” (p.255) と描かれ、2人の兄妹にとっ

てお金は夢であり幻想であったことがわかる。

金銭面においてジュールズはモーリーンと非常に異った性格を示している。彼は叔父のサムソン (Samson) によって成功のチャンスを手中に収めながら、それよりもナディーン (Nadine) に逢うことを第一に考えている。彼は物質的成功よりも恋人への愛の方を選んだのであった。しかしながら、彼女との愛において2度の苦い経験を被っている。彼女との真実の愛を確信していたが、彼女から2発のピストルを撃ちこまれる。

For many months he had inhabited a body ... sewed up, plugged up, maybe stuffed with bloody cotton pads. They had gotten him ready for use again. But gratitude? Did he have to feel gratitude? His mind went dim. He'd outlived himself, in a body. He had become a weight, Jules, an object, ..." (p.444)

ジュールズはモーリーン同様「植物の状態」(vegetative state) となり、無為のままの物体として自己の存在を失った。ナディーンとのロマンティックな愛を信じていた彼は、愛の不可解とも思える彼女の衝動によって裏切られたことになる。彼女はピストルで彼を撃った後、自らも死を選んだ。これはオーツの小説にしばしば登場する若い金持ちの女性の1つの典型であり、結婚生活の中で自己を見失い、自殺まで行かなくとも mental illness の何らかの症状を見せている。

ナディーンが自殺しようとした動機は、良家の娘の持つ伝統的なモラルの意識と未来のないジュールズとの愛による愛憎相反する「2つの感情」(ambivalence)⁸⁾によるものであったと言えよう。しかし彼女の死への願望が達せられなかったことは、著者オーツの小説のテーマに基づく展開であり、Friedman の言うように、“... in the discrepancy between romantic intention and prosaic result, lies human limitation; in this case, it is a limitation that saves.”⁹⁾ 死を願望しながら生存し続けねばならないというのは、人間は容易に死による逃避を選ぶことは出来ないという人間の限界を示すものであろう。

モーリーンの場合は、最初は家族を愛していたが、環境による不安と母親の干渉の煩わしさそして両親の偏見などから家族への愛情よりも嫌悪と家族からの逃避の願望が強くなり、図書館へ通うことになった。自己喪失という出来事の後、mental illness から回復し、働きながら大学で勉強することになる。それまで男性や家庭生活というものを恐れていたが、結婚を決めている。それは孤独な生活の不安からの決意であり、恋愛から生まれたものではない。生来他者への愛情に乏しかったモーリーンは、結婚相手として自ら決めたジム・ランドルフ (Jim Randolph) に対しても愛情を抱いていない。ジュールズにとってナディーンへの愛は永遠で、彼の人生の夢であるのに対し、モーリーンにとって愛情は人生の希望をもたらすものとなっていない。

ロレッタはユニークな自己「self」を持っているが、彼女の子ども達もそれぞれ相対する生き方の中で、オーツは1つの共通するcentral themeとして“*How does one be one's self?*”¹⁰⁾という問題を追求していると言えよう。自己中心的で、自己の肉体を頼りに生きて来たロレッタでさえも、戦争に行った夫を田舎の単調な生活の中で待ちながら、自分を省みて考えている。“*She walked around the cleared-off part of the farm, testing her body by touching her lips and thighs and stomach, asking herself who she was and how she had come to be so exhausted and old when nothing permanent had really happened to her. ... Nothing was permanent yet. Nothing had fixed her yet.*” (p.72) と、自分は何者かを問い、永続的で固定したと思っていた自分の人生に疑問を抱いている。

ロレッタにも夫の事故死、再婚、離婚、デトロイト暴動というように、恋人の死後も幾つかの特別な出来事が生じる。彼女がそれらを乗り越え生き延びて来る事が出来たのは、常に再出発出来る生来の楽天性であり、“Loretta was always ready to begin all over again.” (p.412) 自己の肉体を信じ、自己の限界を知っていることにある。この点がモーリーンと母親の大きな相異点であり、モーリーンは母親の性格や生き方を嫌い、“She was not her mother’s daughter.” (p.412) と思っている。

ジュールズとモーリーンは、各々ユニークな「自己」(self)を持ち、生き方において好対照を為している。ジュールズは自己主張が強く、物事に動じず、他者よりも自分の力を信じている。“He believed in himself. He did not trust anyone else.” (pp.105-6) ジュールズには他の2人よりも多くの偶発事件が生じたり自ら事件を起こしたりする。子どもの頃、納屋に放火したり、警官に追われピストルで撃たれそうになる。父親の死、彼の雇い主のゲッフェンがナイフで刺され、ジュールズ自らもピストルで撃たれ、デトロイト暴動に巻き込まれた時には、ついに自ら暴力を行使し、警官を殺してしまう。

このように暴力に封じ込められた世界に住み、予期できない社会の中で、生存し続ける事が出来たのは、彼の場合、自分自身を十分に把握していたことと自分自身を信頼していたことに他ならない。彼は自らのことを次のように考えている。

He thought of himself as pure spirit struggling to break free of the morass of the flesh. He thought of himself as spirit struggling with the fleshly earth, the very force of gravity, death. (p.274)

自分を泥沼から抜け出そうとする「純粹精神」(pure spirit)とみなし、この肉臭のにおう俗世間と闘う精神そのものだと考えている。ジュールズ個人の主題は“Of the effort the spirit makes, this is the subject of Jules’s story; of its effort to achieve freedom, ...” (p.274) とあるように、物質主義の世界においても富や名誉を追求するのではなく、真の自由を獲得するため、不屈の精神を貫くことが若者ジュールズの姿であることが示されている。モーリーンとは違ってジュールズは自己の運命を嫌ってはいない。“Jules thought amiably, Jules Wendall is my fate, ...” (p.296) 従って、彼は自分が植物人間になった時も、それを人生の一部として容認している。*them* の中には偶然の出来事が多い。しかし「人間の精神の自由は偶然性の場において発揮される」“... contingency is a necessary condition of spiritual freedom.”¹¹⁾ 言える。

ジュールズとは逆に、モーリーンは自信を抱けず、他者への関心や愛情も持っていない。子どもの頃から自制し目立たぬように用心深く行動し、理由もなく怯えることもあった。家族への不信が彼女を自己の内面にのみ目を向けさせている。モーリーンにも偶然の出来事が生じる。自分の責任ではないのに図書館の本の破損で罰金を支払わされたり、クラスの書記に選ばれながら「書記用議事録」(secretary’s minutes) の粉失等の小さな事件に翻ろうされ、自分が並はずれた危険にさらされている恐怖を覚え、ついに“It seemed to Maureen that her life was coming undone. The world was opening up to trap her, ...” (p.170) と人生への絶望感が強くなる。彼女の苦悩が、彼女の価値観に影響を及ぼし、学業への熱意は金銭への関心と移って行く。希望どうり男からかなりの額のお金を得ることが出来たが、それを本当に信頼できるかどうか疑問と不安が生じる。

What would happen if everything broke into pieces? It was queer how you felt, instinctively, that a certain space of time was real and not a dream, and you gave your life to it, all your energy and faith, believing it to be real. But how could

you tell what would last and what wouldn't? How could you get hold of something that wouldn't end? Marriages ended. Love ended. Money could be stolen, found out and taken, Furlong himself might find it, or it might disappear by itself, like that secretary's notebook. Such things happened. Objects disappeared, slipped through cracks, devoured, kicked aside, knocked under the bed or into the trash, lost. Nothing lasted for long. (p.212)

案の定、父親ファーロング (Furlong) が彼女の本の間のお金を見つけ、彼女を殴打し、モーリーンは意識を失う。1年3ヶ月後 *mental illness* から回復したが、著者オーツへの手紙の中で、その時の彼女の心境を語っている。精神的回復がなされ、自己にめざめ社会に目をむける。そして過去1年間の新聞を読む時、偶然の出来事に対する自己の無防備と孤独な自分の姿を発見している。“I only want to escape the doom of being Wendall all of my life.” (p.338) と述べて、彼女はモーリーン・ウエンダルという自分の運命から逃げることを考え始める。

ロレッタは16歳の時ハワードとの結婚によって殺人事件の窮地を脱しようとした。モーリーンも26歳になって自分の内面の変化を認めている。“Everything in me aches for a husband. A house.” (p.338) と語り、ロレッタと同じように結婚によって自己の運命の転換を図る。結婚相手のジム・ランドロフ (Jim Randolph) には妻と3人の子どももいる。“She wants to marry him and take him from his wife and three children—*his wife and three children* are a sign that attracted Maureen at once, for he is settled down, a good man, he was prepared his future and seems content with it, he is a perfect husband.” (p.411) このように妻と3人の子どもがいることが彼女にとって男性の人格を保証するものであり、自己の未来を託することが出来ると考えている。モーリーンの結婚は倫理的正当性のない方法であり、明らかにオーツの *irony* があると思われる。

結婚後、彼女自身の出産の近い頃になっても “Toward men she could really feel no love, not really. She would have a baby with her husband, to make up for the absence of love, to locate love, to fix herself in a certain place, but she could not really love him.” (p.411) というように、夫への愛情が抱けないことを補うべく出産するのである。これもまた、オーツの *irony* ではあるが、自己を見失った女性の自己発見への唯一の可能な方法であったと思われる。彼女はジュールズに、現在の生活を守るために自分の過去を忘れ、肉親をも忘れたいたいという気持を告げる。“I'm going to forget everything and everybody. I'm going to have a baby. I'm a different person.” (pp.506-507) このことばは、かつてロレッタがハワードと結婚した時もらったことばと皮肉にも全く同じことばである。

オーツの作品を読んだ後、どこか生焼けの餅を食べたような感じが残る。それは登場人物達が彼らの住む偶然性の支配する世界から解放されていないからではないだろうか。著者はそういう世界から逃れられないことを彼らに気付かせ、妥協して生きる知恵を彼らに見い出させている。

現実の認識、自己の認識の深さや現実対処の方法は三人三様である。母親ロレッタは若い頃から如何なる状況でも自分を順応させ、過去を忘れ、男性を許すことが出来たから生き延びることに努力を必要としなかった。ジュールズはこの点で母親と似ている。ナディーンは行為を許し、彼女との愛を将来の夢と考えている。“As long as he had his own car he was an American and could not die.” (p.400) という彼の基本的な考え方は、自己の精神の闘いを確信し、エネルギーを秘めた現代のアメリカの若者の生き方を示唆している。

III

them の冒頭の “... because we are poor, shall we be vicious ?” [John Webster, *The White Devil*] という epigraph は, *them* の中の予期せぬ出来事と暴力の溢れる世界において, 貧者が社会に対して投じる反語的な問いと思われるが, 物語の中でオーツはこれに対して十分に答えているのだろうか. ある批評家は “... in the body of the work there’s no suggestion that alternatives to viciousness—or, at the least, interruptions of it—could exist in the present world.”¹²⁾ と述べて, 少なくとも *them* の中では, 主人公達の「墮落」(viciousness) に替わる好ましい答を見い出せないと指摘している. オーツは果して主人公達の生き方を倫理的に捉えて *them* の人々を描いたのであろうか.

them の主人公達の中には理想的な人間像と思える人物は存在しない. オーツはインタビューで, ジュールズに対して「人間的には好きだ」(I was very fond of Jules Wendall.)¹³⁾ と語っている. 確かに, 全体的印象としてジュールズは希望と愛情に満ちた好青年と言える. しかし彼は明かに殺人という罪を犯している. モーリーンは孤独を愛し物静かな娘であり, 父親の暴力の被害者である. 同時に, prostitution を行い, 自分の結婚の為にジムの家庭を破壊する加害者である. この中のどの人物も偶発事件の被害者であり, 自己の欲望の加害者である. 道徳的に善人の典型あるいは理想的人間の典型は登場してこない.

ロレッタは自分が特別な人間だと思っている子ども達に向って, 「皆な同じ人間だよ」(You’re no more special than me.) (p.118) と言っている. 彼らはお互いに「名もない他者」(nameless others) であり, 普通のアメリカ人であった. 彼らの各々が, 他者にとっては「彼ら」‘them’なのである.

them の人物達は巧みな作家の手腕により, ユニークな個性を持って描写されている. しかし, オーツは naturalist の持つ登場人物を際立たせるという伝統的な技法のストーリーテラーのタイプではない. 人物描写は巧みではあるが, 表現は情況描写の場合と同様で極めて乾いた客観的筆致である. 人物に重点を置くことは, 作者の「道徳的規範」(moral standards) を人物達に押し付けることになり易い. それは人物達の自由を奪うことになるというのが, オーツの考え方ではないだろうか. 主人公達は明かに相異点を持ちながら, 全体的にはどこか類似性を感じる理由は, その辺りにあると思われる. オーツは主人公達の行為に対して彼女の「道徳的判断」(moral judgement) を下すのではない. 彼らの現実の姿を写しているのである.

Author’s Note において, 「これは小説の形をとった歴史である」と書いている. オーツにとって現代の歴史と言えるのは Hamlet のように生と死の苦悩に身をまかし, 自らを死に導く悲劇的人物像ではない. モーリーンの結婚相手の英文学者ジムにシェイクスピアの人物を通じて, オーツは *them* の主題を語らせている.

He did not trust Shakespeare. Tragedy had always terrified him with its blunt, raw stops and starts, its elegant language and bloody endings and calm revivals, a sense of apocalyps followed by an ordinary morning. Horatio and Fortinbras playing chess in a drafty, velvet-hung room, yawning and patient, good men always a Cassio left over, bruized but energetic, and Kent dazed with the past but optimistic enough to take on the future, the long rise of history. (pp.416-417)

母親のロレッタもジュールズもモーリーンも全てが生き残った. ロレッタはホレイショ (Horatio) かフォートインブラス (Fortinbras) かもしれない. ジュールズはキャシーオ (Cassio)

タイプの間人かもしれない。モーリーンは他の2人とは異っていたが、人生の絶望を経験したあと、結婚生活を始めることによって自己発見を為し、「いつもの朝」(the ordinary morning)を迎えることが出来た。

オーツの小説では、“survival replaces fulfillment and initiation replaces transcendence.”¹⁴⁾と Friedman が言っているように、オーツは物語の結末として主人公の願望の達成やあるいは自殺などによる現実の超越ということよりも、むしろ彼らが生き残り、人生を再出発することの方がより現実的な人間の姿であると考えているのではないだろうか。このような結末が、彼女の小説には form がないと言われる理由であろう。オーツの作者としての役割は、人間の生き方に倫理的判断を下しながら人物を描写するのではない。単なる歴史の「記録者」(recorder)の役割を果していると言える。アメリカの大都会に住む貧しい人々の生活と彼らに起こる偶発事件を背景にして、物質文明のどこか不気味さを持つ社会と個人の係わりあいの中に、アメリカ人の reality, 言い換ればその「心理的現実」(psychological reality)を記録していると言えよう。

注

- 1) Oates, J.C.: *them*, 11-12, The Vanquard Press (1969) 以下引用箇所のとに括弧に入れて示した数字は全てこの書物のページ数を示す。
- 2) Creighton, J.V.: *Joyce Carol Oates*, 65, G.K. Hall (1979)
- 3) *Ibid.*, 63
- 4) Friedman, E.G.: *Joyce Carol Oates*, 78, Frederic Ungar Publishing Co. (1980)
- 5) *Ibid.*, 75
- 6) Grant, M.K.: *The tragic vision of Joyce Carol Oates*, 164, Duke Univ. Press (1978)
- 7) Waller, G.F.: *Dreaming America*, 129, Louisiana State Univ. Press (1979)
- 8) Friedman, E.G.: *op. cit.*, 83
- 9) *Loc. cit.*
- 10) Creighton, J.V.: *op. cit.*, 66
- 11) Waller, G.F.: *op. cit.*, 131
- 12) PeMott, B.: “The Necessity in Art of a Reflective Intelligence,” in *Critical Essays on Joyce Carol Oates*, by L.W. Wagner, 21, G.K. Hall (1979)
- 13) Bellamy, J.D.: *The New Fiction*, 23, Univ. of Illinois Press (1972)
- 14) Friedman, E.G.: *op. cit.*, 89